

働きを抑制して、〈感性により〉自然・宇宙の働きをありのままに感じ直観（如実知見）していくことにより、仏智の働きの運ばれていく行であり、初期仏教における定・慧の修行のバリエーションとして位置付けられる。親鸞はこれらの行為がすべて、阿弥陀仏の誓願の働き（仏智）によってなされるとした。

現代人の多くは、「言葉による知的・概念的な理解・認識」こそが「正しい理解・認識である」と信じ、「観念の世界」に埋没してしまい、ありのままの世界に出会うことができずにいる。しかし言葉とは「経験した物事」に対して付与される記号であるため、「経験していない物事」を表す言葉は、当人にとって理解・認識ができない。言葉は共通の経験を持つ人々の間でのみ通用する記号である。また、言葉は「経験した事柄」に対して付与される記号であるため、言葉それ自体は実態・実体を表すものではない。私達がある言葉を手掛かりに、物事を考え認識しようとする時、その言葉と私達自身の経験（あるいはその事柄についての印象）との繋がりを探し、それらを組み立てていくことになる。だから私達は「言葉による知的・概念的な理解・認識」によつては、物事や実態・実体、ありのままの世界に出会うことができないのである。

自然に生きる道として親鸞が示したのは、「南無阿弥陀仏とたのむ」生き方であり、それは仏智の不思議を信じ、念仏し、「はからひ」を離れて、如来の誓願にまかせるところに、無上仏への道が開かれるというものであった。

現代人の認識方法は、親鸞が言うところの「はからひ」そのものであり、現代人は自らの「はからひ」によって、ありのま

まの世界を認識できる仏智の働きを拒絶してしまい、閉塞した人生を送ることを余儀なくされている。現代人は「はからひ」の故に、仏智から遠ざけられ、孤独・不安・不信・虚無感等の苦悩に苛まれているのではないだろうか。親鸞の「自然法爾」は、現代人の認識方法・生き方について大きな疑問を投げかけていると言えよう。

靈山勝海『末灯鈔講讃』二〇〇二年、永田文昌堂。嬰木義彦「親鸞書簡にあらわれた法然上人（その二）——「義なきを義とす」の教説をめぐって——」（『真宗学』四五・四六合併号、一九七二年）参照。

親鸞の六字釈について

貫 名 讓

『教行信証』『行巻』と『尊号真像銘文』（以下『銘文』）に見られる六字釈について、『行巻』の読解に『銘文』の文言をそのまま当てはめ、たとえば「帰命」というのは私が帰命する私のはたらきである……そのはたらきは、とりもなおさず私を召喚したまう如来のはたらきの私の上に具体化したもの……南無阿弥陀仏とはそのようなはたらきである」（星野元豊『講解教行信証』二五五頁）に見られるように、『行巻』の文言も衆生の心相において捉えようとする。それぞれ六字の解釈が施されているが、『行巻』における「南無」（帰命）は法の道理として、『銘文』における「南無」（帰命）は衆生の心相として展開され

ていると考える。そこで小論においては「行巻」の六字釈の特徴を問題にした。

では、「行巻」の特徴はどこにあるのか。それは「南無」すなわち「帰命」の解釈である。本来は「信」を意味する「南無」(帰命)を、親鸞は「南無」(帰命)こそ「行」であると表しているところに独自の發揮がある。親鸞は、「行巻」において「南無の言は帰命なり。……帰命は本願招喚の勅命なり」と明かし、さらに「帰命」に字訓釈を施しているところからも、その特徴がうかがえる。「帰」には「ゆく(往)、かえる(還)、おもむくところ、よる、身のよせどころ」(『大漢和辞典』(諸橋轍次著)参照)、「説」は「教えを説く」ということ、「税」は「すすめとく、いざなう」という意味があり、さらに「悦の音なり」「税の音なり」と「音」を「こえ」と訓んでいる。さらに「命」の釈のうち「業」には「わざ。なりわい。動くさま」、「招引」には「手をもってまねく」、「召」には「口をもってまねく」といった意味がある(『大漢和辞典』および『字源』(簡野道明著)参照)。また「招喚」の語は「信巻」の大信釈・善導引文と欲生釈に、「勅命」の語は欲生釈にも見られるが、いずれも如来の「まねきよぶ」「おほせ」である。本願(第十八願)にもとづく弥陀の衆生救済が、「南無阿弥陀仏」となつて衆生の前に来たっている。それが「行巻」六字釈に明かされる「帰命」である。

ところが多くの場合、ここに『銘文』の「帰命は、すなはち釈迦・弥陀二尊の勅命にしたがひて、召しにかなふと申すことばなり」を重ね、「行巻」と『銘文』の「帰命」を同一に捉え

てしまっている。先述したように、「行巻」六字釈における「帰命」は「行」である。「信を示す南無の語が、阿弥陀仏が南無する場合に限り、その「南無」が「行」を示す言葉となるのです」(岡亮二『教行信証口述50講』教行の巻二七九頁)と示されるとおりである。衆生救済の願心が「招喚の勅命」すなわち声(おほせ)となつて現れている。故に「即是其行」を「南無」の意味として示したのである。

このように、「行巻」六字釈に示される「南無」(帰命)は特異なものであるが、その特異性が、『銘文』の六字釈との対比によつてより明らかとなる。「言南無者」といふは、すなはち帰命と申すことばなり。帰命は、すなはち釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがひて、召しにかなふと申すことばなり。このゆゑに「即是帰命」とのたまへり」の「釈迦・弥陀の二尊の勅命」というのが正に「行巻」で明かされる「本願招喚の勅命」にはかならない。あえて「行巻」の「帰命」を『銘文』に組み入れて解釈してみるならば、衆生の帰命は如来の帰命を聞き信じていくこととなり、この衆生の帰命が「信巻」で明かされる衆生の信心である。このことから「行巻」で説き示される「南無」(帰命)に「行」としての意義を明かした親鸞の意図が見て取れるのである。

以上、「南無」(帰命)を如来のはたらきとして表したところに、親鸞の「行巻」六字釈の特徴がうかがえるのである。